

四 御恩の板を擔いで

自他の真相を見、或は他の忠言に聞く時は、須く板を下さねばなりませぬが、いざ實行といふ場合自分の目的に達するには、馬車馬式に兩方に板を擔いで、兩擔板漢でなくてはならぬ。此場合板を下して了つては、「彼方立つれば此方が立たず、此方が立つれば彼方が立たず、兩方立つれば身が立たず」。終には身を亡ぼさねばならなくなる。

親鸞聖人はその信仰に於て、正しくこの兩擔板漢であらせられた。親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり」。よき人の仰せといふ厚い大きな板を擔いで、無礙の一道たる念佛者の道を、さつさと行かれる。行先が地獄であらうが、極樂であらうが、そんな事に構ひなく進まれる。こゝに聖人の道が開ける。「詮ずる處愚身が信心に於ては斯くの如し、此上は念佛をとつて信じ奉らんとも、また捨てんとも、面々の御計ひなり」。何といふ力強い鮮明な態度であります。

「善き事を思ひつくるは御恩なり、惡しき事だに思ひすてたるは御恩なり。捨つるも取るもいづれも御恩なり」蓮如聖人も、御恩の板を兩方に擔いだ兩擔板漢である。

私の宗教は唯一個でなくてはならぬ。アーメン陀佛法蓮華經、遍照金剛薩婆訶では不可ぬ。私は私の宗教として南無阿彌陀佛一天張である。絶對他力の本願一本鎗である。勿論すべての宗教も見る、見るは見ることが板を下して見る。板を降してこの法界を眺むる時、宇宙悉く如來大慈悲の顯現ならざるはない。「迷から地獄も餓鬼も出来るなり、盡十方は彌陀のふところ」(徳本上人)「九十五種世をけがす、唯佛一道きよくます、菩提に出道してのみぞ、

火宅の利益は自然なる。茲に私は自他の眞相を見極むる時、須らく自力我慢の板を降り、自己の所信に向つて立つ時、宜しく御慈悲と御恩の板を兩方に擔ぎ、念佛の一行を慕直に進み行く。然り私は此の意味に於ける、一個の兩擔板漢たることを得る光榮を、我が如來に感謝する者であります。